

『勝利の光におおわれて』 ヨハネ16:29-33

16:29 弟子たちは言った、「今はあからさまにお話しになって、少しも比喻ではお話しになりません。

16:30 あなたはすべてのことをご存じであり、だれもあなたにお尋ねする必要のないことが、今わかりました。このことによって、わたしたちはあなたが神からこられたかたであると信じます」。

16:31 イエスは答えられた、「あなたがたは今信じているのか。

16:32 見よ、あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来るであろう。いや、すでにきている。しかし、わたしはひとりではない。父がわたしと一緒におられるのである。

16:33 これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」。

●序論

敗北の経験が、受け継がれ、人を成長に導く。

わたしたちは今、イエスさまの十字架に目を向け、また弟子たちの挫折の経験に目を向けようとしています。

わたしたちはその挫折の経験を見るだけでなく、回復の経験をも受け継ぐ者とされていることを思うのです。

わたしたち信仰者にとって、挫折や敗北はそれだけで終わらない。イエスさまにあるとき、それはイエスさま由来の平安と勝利にあずかる経験へとつながります。

:33) これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。

●本論

I. イエスはすべてをご存じだから

今日弟子たちの告白、「あなたを信じます」との答え。それは普通にイエス様にとっては、とてもうれしい言葉だったと思います。

でも、ここで「すべてをご存じのイエス様」は、こう答えられました。

16:31-32 イエスは答えられた、「あなたがたは今信じているのか。見よ、あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来るであろう。いや、すでにきている。

イエス様が見ていたのは、弟子たちの”挫折”であり、そしてこの弟子たちが、自分を置いて逃げ出してしまうということでした。

ただそれを知った上で、「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を

出しなさい。」と弟子たちを励ましておられます。

ここに「すべてのことをご存じである」お方が、敗北とも言える挫折や悩みを通るであろう弟子たちを、とても大切にしておられることがわかります。

わたしたちの側では、挫折や敗北があると、それを勝手に失望や絶望に結びつけてしまいます。また失望で、わたしたちは自分自身を消し去りたい思うかも知れません。

でも、「すべてを知るイエス様」は、そんな私たちをも愛して、大切に、「わたしの平安が与えられるように」とも言葉をかけて下さっています。

なぜ、ヨハネはこれらの言葉を記録したのか。

自分たちの信仰の失敗を、何か美化したり隠すためではありません。

「わたしたちもこんなに未熟だった。でも、そんな私たちをイエスさまは愛の勝利のうちに包んでくださっていた」と証しするためなのです。

改めて、ヨハネのこの13章以降のイエスさまの告別メッセージの初めの言葉です。

13:1 …世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。

今日聞いている、イエスさまの言葉もまた、その愛の証であるとわかるのです。

Ⅱ. イエスは、気づきをくださる

自分が愛するこの弟子たち、そして自分を愛しており、自分を今信じると告白してくれているこの弟子たち。その彼らが、自分を一人置き去りにして逃げ去ってしまうということ、”知っている”とはどういう気持ちだったのでしょうか。

ここで「あなたがたは今信じているのか」という、イエスさま言葉を心に留めます。私たちは、自分がどれだけイエス様のことをわかったか、そして信じたかを主張することがあります。

そんな私たちは、「挫折」と「悩み」を通して、その知識と信仰がどれほど自分中心の、「自分が強い」という信仰であったかに、気づかされることの大切さを覚えます。

”自分が信じてさえいれば”、”自分で何とか…”、というものではなく、そこでイエス様のお言葉に耳を傾ける、心に隙間を持たせていただく…ことは大切です。

実は挫折や敗北、悩みを通ることには、そのような意味があるのです。

星野富弘さんの詩にこんなものがあります。

「いつか 草が、風に揺れるのを見て、弱さを思った
今日 草が風に揺れるのを見て 強さを知った」

自分が元気で、がんばれば何でもやっていけると思っていた頃は、風に揺れている草を弱い存在だと思っている自分がいた。

しかし何一つできなくなった今、キリストに抱きかかえられ、キリストとともに生きることの強さというものを知ったという詩です。

「ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。・・・なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです」(Ⅱコリント12:9,10)

イエスさまの勝利は、わたしたちが十分に理解し、確信し、完璧に信じた…、という「その先に」あるものではありません。むしろ、わたしたちがまだ弱く、迷い、恐れているような「その時にすでに」イエスさまは勝利してくださっている、それがイエスさまのことは、「わたしはすでに勝っている」という言葉です。

だから、自分の力始まりではありません。むしろ自分弱さの中で気づく、イエスさまの深い愛を見出すことができるよう、導かれていることを知りたいのです。

Ⅲ. だからイエスさまにつながることで

永井信義先生が神学生に向けて語った言葉。

「いつもどうしようもなく、神さまを必要としている姿勢が重要です。聖書のぶどうの木のとえを題材にして、わたしたちは枝であって、木にはなれません。聖書が語るように、イエスさまにつながり続ければ、豊かに実を結ぶのです。」

「いつもどうしようもなく、神さまを必要としている姿勢が重要です」。

イエス・キリストご自身が語る、ご自分の姿をあらわす言葉に目を向けましょう。

:32)「しかし、わたしはひとりではない。父がわたしと一緒におられるのである。」

神の子でありながら、人となってこの地上に来られたイエスさまは、父なる神さまの存在をいつも心にとめ、いっしょにいることを求め、歩みぬいた。それが、イエスさまの平安、そして勝利の歩みに結ばれます。

イエスさまの言葉は、そんなイエスさまにつながり続けることに目を向けさせてくださっています。

信仰の迷いやつますきに翻弄されている自分に気づくことはありませんか？…

イエスさまはそのすべてを知っていてくださって、「しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」とお語り下さったのです。

そして、「いつも、どうしようもなくイエスさまにつながり続けている」ことが大切であるとわかるのです。

わたしたちが信仰に立つことができるのは、自分の能力や自分の強さによるのではあ

りません。イエスさまがすでに勝利をされたというその中に、わたしたちはおかれているからです。この勝利は、変わらないからです。

信仰とは、常に強くあり続けることではなく、その弱さの中でもこの勝利者なるイエスさまにとどまることなのです。

さいごに)

6:33 これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。

今日、イエスさまについて「勝利」とか「勝利者」という言葉を用いました。ここで誤解のないように申し上げます。

イエスさまは、「この世の勝利者だ」と言われたのではありません。

「世に勝っている」「この世に勝利をおさめた」といわれているのです。

つまり、「この世の価値観」「この世の標準」「この世で圧倒的と言われるすべての権威や不正」「この世の勝ち負け」という基準に、真実な愛とご自身の犠牲をもって勝利をおさめられたということです。

現実のわたしたちは、この世で挫折、悩み、迷いに翻弄される歩みをしているかもしれません。だからダメだ、とイエスさまは、あの弟子たちにも、わたしたちにも言われていないのです。

「それでも私は、あなたをあきらめない。あなたを愛しぬいている」と今も、あの十字架を通してわたしたちに向けて証ししてくださっているのです。

これが今日聖書が語る「勝利」です。わたしたちはこの勝利の光におおわれて、信仰の生活を歩ませていただいている、このことを心から感謝し受けとめましょう！